Tolerance

tolerance/anonym

GALERIA OFICIOS, FLORENCIA

tolerance/anonym
SIDE A
Two owls
I wanna be a homicide
osteo-tomy
JUIN-Irénée
anonym

SIDE B
laughit in the shadows
through the glass
tecno-room
Voyage au bout de la nuit

personnel
syntheszer with electronic echo unit,
piano & voice : Junko tange
effective guiter : masami yoshikawa
dedicated to the quiet men from a tiny girl

Recorded & Mixed at studio <sounds creation> osaka April 1979
Engineeered by Naoki Oku Assistant Engineered by Yoshiteru Mimura
Cover Photo by Toshimi Kamiya

Produced by Yuzuru Agi

Original 1979 reel-to-reel tapes transferred by
Any Sound Studio
Premastered by Soichiro Nakamura at Peace Music
Mastered by Stephan Mathieu
Cut by Josh Bonati

Printed and pressed by Gotta Groove
Layout by Dan Selzer

Under exclusive license from Tolerance/Studiowarp
℗ and © 2023 Mesh-Key Records
MKY033

tolerance/anonym

SIDE A

Two owls
I wanna be a homicide
osteo-tomy
JUIN-Irénée
anonym

SIDE B

laughiñ in the shadows
through the glass
tecno-room
Voyage au bout de la nuit

personnel
synthesizer with electronic echo unit,
piano & voice : junko tange
effective guiter : masami yoshikawa
dedicated to the quiet men from a tiny girl

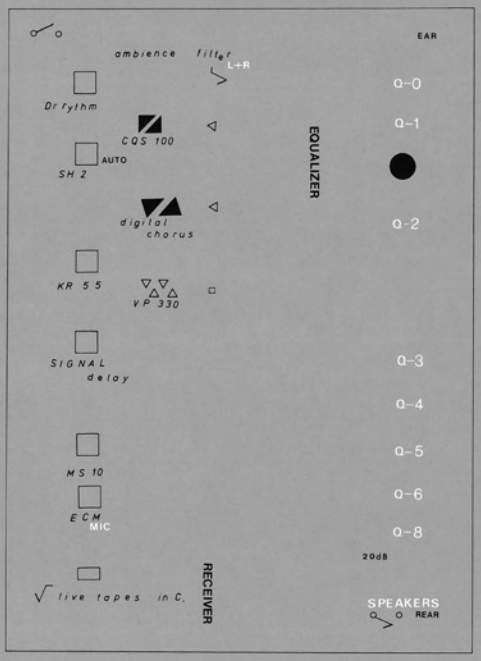
Original 1979 reel-to-reel tapes transferred by
Any Sound Studio
Premastered by Soichiro Nakamura at Peace Music
Mastered by Stephan Mathieu
Cut by Josh Bonati

Printed and pressed by Gotta Groove
Layout by Dan Selzer

Under exclusive license from Tolerance/Studiowarp
Ⓟ and © 2023 Mesh-Key Records
MKY033

sió savanà

d ̊ i v ! ̊ n



mesh-key records

ØRIGINAL 1980 AND 1981 REEL-TØ-REEL TAPES
TRANSFERRED BY ANV SØUND STUDIØ
PREMASTERED BY SØICHIRØ NAKAMURA
MASTERED BY STEPHAN MATHIEU
CUT BY JØSH BØNATI
PRESSED BY GØTTA GRØØVE
PRINTED BY STØUGHTØN
**LAVØUT BY DAN SELZER

UNDER EXCLUSIVE LICENSE
FRØM TØLERANCE/STUDIØWARP

P AND C 2023 MESH-KEY REC0RDS

MKV032

```
  TITLE         LYRICS                    OPERATER

PULSE STATIC
*TRANQILLIA                                  M

1/F"15#^                                     M

MISA****
**GIG'S TAPES IN"C"  ___________________________


SØUND RØUND      ICE IS □■□
                DICE IS *"*                  J
                 NICE PERFUM
                 VØICE PRESERVE
                           GATE TØ THE RAY
                SØUND RØUND SURRØUND  +++-

BØKW WA ZURUI RØBØT
*STØLEN FRØM KAD"
                                             J

               WITH HIS SKILLFUL HANDS
               IT LØSE "" CØNTRØL

SACRIFICE
                ¤^¤¤¤^¤¤¤¤^¤¤¤¤^¤¤¤¤^¤¤¤¤ ^^^^^^

MØTØR FAN      =■==°^°^^■=■■°°^^°==■===_=_=_____

TIEZ REKCUZ
               MIT IHN * TRA°°UMEN ***°°°*°
                         TRA°°UMEN ** *
                                             F


   REC"ED 30/12 '80
       2,5,6/1 '81
   MIX"ED 8,9,12/1


           MIXER:CIMEI-BUSHMAN19VLAM
           LUMINAL:J-TANGE
           INPUT:M-VØSHIKAWA
                  ,HYPERSP+
           CØVER CØNCEPTS:FUSIFIX.GEKKØ-V4
PRØDUCED:MR"AGI.,R.M
```

ØRIGINAL 1980 AND 1981 REEL-TØ-REEL TAPES
TRANSFERRED BY ANY SØUND STUDIØ
PREMASTERED BY SØICHIRØ NAKAMURA
MASTERED BY STEPHAN MATHIEU
CUT BY JØSH BØNATI
PRESSED BY GØTTA GRØØVE
PRINTED BY STØUGHTØN
**LAYØUT BY DAN SELZER

UNDER EXCLUSIVE LICENSE
FRØM TØLERANCE/STUDIØWARP

P AND C 2023 MESH-KEY RECØRDS

MKV032

Toleranceについて
～パンク以後、屹立、モノクロームからなる断想～

よろすず

２枚のアルバム、ジャケット（ライナー）からうかがい知れるわずかながらの情報（メンバーの名前と楽器編成）、そして後年になって発掘／リリースされた数少ないデモ [1]……Tolerance が残したものは、そこからドキュメントを編むにはあまりにも少ない。また、その音楽的な内容や批評的な位置付けについても、リリース元となった Vanity Records の流れや Nurse With Wound List に掲載されたという逸話に関連付くものを除いてしまうと、発表から 40 年以上という月日に比して語られたものは僅かだ。もちろんこの現状には Tolerance の主導者である丹下順子、サポートメンバーであった吉川マサミ両名が、『Divin』(1981) の発表後表立った音楽活動を一切行わず、2023 年現在まで消息すら掴めない状態であることも大いに関係しているだろう。参照できる確定的な情報が極端に乏しい彼女らの音楽について、夢想的な手紙以上のものを書くのは難しい。本稿は彼女らの残した作品を、主に若いリスナーの持つヴィジョンに接続することを念頭に、いくつかの側面から検討し、現在の音楽として発見される可能性を探るものであるが、この企ても大いに夢想的であることは言うまでもない。しかしながら、KYOU RECORDS による CD での再発、そして MESH-KEY によるアナログ／ハイレゾでのリイシューによって日本だけでなく海外にも広くその音源が然るべきクオリティー [2] で届く環境となった今ほど、そのようなものを必然性をもって届けられる機会もないだろう [3]。したためられたいくつものボトルメールは、いまだ揺れる影のような『Anonym』のサウンドの様相そのままといえる Tolerance の評価に、確定的な像を見出す手掛かりとなるかもしれない。そう、平山悠が "『ロック・マガジン』の全部はこれから [4]" と記したように、Vanity Records のすべてもまたこれから、であるのだ。

〈パンク以後〉

Tolerance のサウンドは未だ新たな位置付けを見出す余地、すなわち謎を多く秘めたものであるが、2nd アルバム『Divin』についてはエレクトロニクスによるリピテーションが楽曲の主な骨組みとなっていることからプレ・テクノとして評価できる部分は多く [5]、またこれ以降の Vanity Records の方向性（INDUSTRIAL MYSTERY MUSIC ＝工業神秘主義音楽）を予告するものでもあることから、然るべき評価の方向性は比較的定めやすいと思われる。一方『Anonym』は次作ほどの確信的な方向性には収束されておらず、言うなれば粗削りな状態ではあるものの、それ故に「パンク以降」でこそ生まれ得る様々なサウンドの可能性が、揺らぐ時代の影として折り重なっている。では『Divin』をそのような折り重なった影の内の一つの像に過ぎないと捉えてみるなら（つまり『Anonym』から『Divin』に引き継がれなかった要素から想像を膨らませてみるなら）、そこにはどのようなサウンドが立ち表れるだろうか。例えば「anonym」における影のあるモチーフを巧みに生み出す丹下のピアニズムは、Robert Haigh、更には Vanessa Amara や Lisa Larkenfeld などの寂びれたロマンティシズムを持ったミニマル・アンビエントの地平へと続いてはいないだろうか [6]。「osteo-tomy」の痙攣的なギターとリーディングの協奏には Soic Youth や Rip Rig + Panic など数多のバンドが連なっていくノー・ウェイヴ以降の方法論が、うろつくようなベースの旋律とざわめきのようなピアノと SE で描かれる「laughiñ in the shadows」にはデイヴィッド・リンチ『ツイン・ピークス』などの奇妙な映画／ドラマ作品への親和性が、潜在してはいないだろうか。本作から朧げに浮かび上がるこのような可能性の数々は、私に Tolerance がこの後（もしくは『Divin』の先）に進み得た道筋を夢想させずにおかない。匿名（Anonym）と冠されたこのアルバムは、おそらくその確信性の欠如によって、このように起こらなかった／起こったかもしれない物事への想像を常に刺激する。故にそのサウンドは今もってくたびれず、アクチュアルに響くのだ。

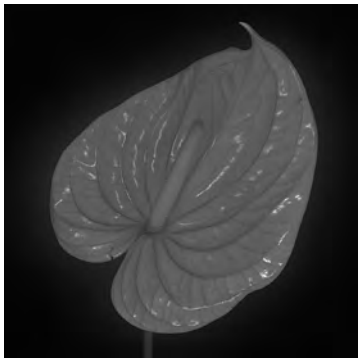
Robert Haigh『Black Sarabande』
(Unseen Worlds, 2020)

Vanessa Amara『Like All Morning』
(Posh Isolation, 2017)

Lisa Larkenfeld『A Liquor Of Daisies』
(Shelter Press, 2020)

〈屹立〉

『Divin』において Tolerance は、エレクトロニクスを中心的に用いることで前作からそのサウンドを大きく様変わりさせた。楽器と電子音による朧げな演奏がまるで彷徨いながら彼岸へ向かうような不安定性を生み出していた『Anonym』に対し、『Divin』はダブ的な処理で抽象性を保持しながらも電子音に絞られた音色の統一性（これによって本作は丹下と吉川の二名によって制作されたという事実をサウンドから推定することが非常に難しい）やリズムマシンによるシーケンスの多用によって、彷徨の果てに独り屹立するようなペシミスティックな境地を感じさせる [7]。そのような音楽性の変異の結果、本作ににおいては前作で多く聴くことができた要素、例えばピアノやギターのサウンドはほぼ姿を消しているわけだが、そんな中で引き続き用いられた要素が丹下による「声」である [8]。エレクトロニクスによってサウンドを組み上げながら、そこに声を絡めていく、こういったスタイル自体は『Divin』以前にも以後にも、常に一定数のアーティストが試みてきた [9] が、偶然か必然か 2023 年現在、その流れには刺激的な新鋭が数多く登場してきている。Felicia Atkinson、Flora Yin Wong、Lucy Liyou、Debit、Kelly Lee Owens、Adela Mede、Laila Sakini、Caterina Barbieri……2023 年の作品に絞っても Susu Laroche『Closer to the Thing That Fled』、Cruel Diagonals『Fractured Whole』、Grand River『All Above』、Sara Persico『Boundary』と、作家やその優れた作品が次々に思い浮かんでくるほどだ。これらのアーティストに Tolerance が直接的に影響を与えた可能性は限りなく低いだろう。制作スタイルやサウンド構成などの共通項からロールモデルだと見做すのも誇大であるかもしれない。しかし彼女らの作品と並んで、現在の音楽として発見されることには一種の必然を確信できる、『Divin』はそれほどの力を秘めている作品に思えるのである。



Flora Yin Wong『Holy Palm』
(Modern Love, 2020)

Kelly Lee Owens『LP.8』
(Smalltown Supersound, 2022)

Grand River『All Above』
(Editions Mego, 2023)

〈モノクローム〉

Tolerance の作品において、音に引けを取らぬほどに魅力的なのがそのモノクロームのジャケットデザインである。『anonym』では神谷俊美の写真が用いられ、『Divin』では COVER CONCEPTS として FUSIFIX、GEKKÖ-V4 との謎めいたクレジット[10]があるこの 2 作、デザインのフィニッシュはいずれも Vanity Records のプロデューサーである阿木譲によってなされている。椹木野衣は阿木の資質を「野性のスタイリスト」と評している[11]が、これらのデザインは Tolerance の「匿名」との題が今もって相応しく思える不安定さを持ったサウンドにスタイルを与える(= なんらかのイメージに統合／収束させる)、正にスタイリスト阿木譲の真骨頂といえる仕事だろう。妖しさ、歪み、マシニックさ、Tolerance のサウンドが表出する様々な表情のどれもが、アートワークを通すことで美しい音楽として統合的に知覚される、その効果の鮮やかさは同じく阿木が手掛けた他の Vanity Records 作品に比しても一段と際立ったものに思えるし、これがなければこのサウンドがここまで美しく響くこともなかっただろうと確信できるほどだ。しかしながら阿木のこれ以降、特に晩年の活動を知る者にとっては、ここに表れたモノクロームなスタイルは更に、一層特別な意味を持って目に映ることだろう。なにせ阿木が晩年熱心に紹介し、ブリコラージュなどでも盛んに用いた音源の数々には、モノクロームかつ美しいアートワークの作品が、そこを最優先に選んでいるのではないかと思えるほどに多いのである。Modern Love、Posh Isolation[12]、Stroboscopic Artefacts、Downwards、Second Sleep、そして Stephan Mathieu による Schwebung、同時代の音楽動向からこれらをピックアップしたその審美眼の底流には、Tolerance のデザインが放つ静けさと官能性のマリアージュの感覚が常に息づいていたように思えてならない。阿木自身が Vanity Records 作品のフェイヴァリットに『Divin』を挙げていたことは、その効果の鮮やかさを鑑みれば頷ける話だ。しかしそれだけでなく、Tolerance 作品のデザインは阿木にとって、晩年まで通じるモノクロームへの偏愛が初めて結晶化された仕事として、特別な位置を占めていたのではないだろうか。

The Stranger『Watching Dead Empires In Decay』(Modern Love, 2013)

Millie & Andrea『Drop The Vowels』(Modern Love, 2014)

Puce Mary『The Spiral』(Posh Isolation, 2016)

Kerridge『Fatal Light Attraction』(Downwards, 2016)

Hvide Sejl, Varg, F. Valentin『Brazil』(Posh Isolation, 2017)

Stephan Mathieu『Radiance』(Schwebung, 2018)

注釈

---

1 『Dose』と『Demos』(ともに KYOU RECORDS-remodel)

2 MESH-KEY からの再発は Stephan Mathieu がオリジナルのアナログ・テープから新たにマスターを作成した新装版となっており、よりクリアかつエッジーなサウンドで Tolerance の音楽が収められている。特に電子音がメインとなった『Divin』はチープな環境で再生してもそのクオリティの飛躍が実感できる。

3 MESH-KEY からの再発によって、既に Pitchfork に Philip Sherburne によるレビューが、boomkat にはプロダクト・レビューが掲載されている。
https://pitchfork.com/reviews/albums/tolerance-anonym-divin/
https://boomkat.com/products/anonym-0c9c04ef-3f4f-4cfb-9031-1b137c125b63
https://boomkat.com/products/divin

4 中村泰之 監修『AGI』(きょう RECORDS, 2022) 掲載

5 Pitchfork 掲載の Philip Sherburne によるレビューでは Thomas Brinkmann などによるミニマル・テクノや、ダブ・テクノが引き合いに出されているが、Tolerance のプレ・テクノな音楽性は以降のダンス・ミュージックの文脈には完全にはまりきらず、近年のポスト・インターネットな感性によるクラブ・ミュージックのリファレンスにもなり得ないものという印象がある。個人的にはロサンゼルスのレーベル Peak Oil などがリリースしているそれらの文脈に回収され切らないストレンジな作品群が感触としては近いのではないかと感じるところだ。

6 『Dose』の 5 曲目や 7 曲目に表れるストリングス系やくぐもったシンセのサウンド、『Demos』に含まれるイーノの『Ambient 1: Music for Airports』を思わせるクワイアもこの妄想を加速させる。

7 『Anonym』から『Divin』へかけての作風の変化には様々な要因があったと思われるが、『Divin』の最終曲「Tiez Rekcuz」が Cluster の 1974 年のアルバム『Zuckerzeit』のアナグラムとなっていることから、彼らの音楽性は小さからぬ参照点だったのではないかと思われる。

8 Tolerance の「声」の扱いについては『Anonym』と『Divin』の間の時期である 1980 年頃に制作されたと思われる『Dose』と『Demos』の存在も興味深い。特に『Demos』には Brian Eno『Ambient 1: Music for Airports』を想起させるクワイア・アンビエントなパートが含まれており、同時代のイーノの動向やそのサウンドも(彼と共演したクラスターに並んで)Tolerance の参照点だったのではと思わせる。

9 そういった実験の一つの金字塔である Robert Ashley『Automatic Writing』は、奇しくも『Anonym』と同じ 1979 年にリリースされている。シンセやオルガンによる「フリーフォームな演奏」の側面とそれを含んだ様々な音響素材を用いた「テープ操作によって成される音楽」としての側面を持つ本作は、『Anonym』と『Divin』と並べて聴くとその間の繋ぐサウンドのように聴こえなくもない。

10 FUSIFIX は複雑骨折した時に入れるチタンボルトを指す語である。『Divin』のジャケットは最初に『Faust』(1971) に倣うかたちでレントゲン写真を用いたスケルトンデザイン(丹下は歯科関係の仕事に従事していたためレントゲン写真を入手することが可能だった)が検討されたが、費用の面で断念せざる負えず、最終的には Faust の他作品(『So Far』や『IV』など)も参考にいくつかのイメージを統合することで制作されたという経緯があるため、この語は制作段階で話題に上がり遊び心で記載されたのかもしれない。GEKKÖ はチベット仏教用語に同じ単語があるようだが、アルバムとの関係性は不明。

11 中村泰之 監修『AGI』(きょう RECORDS, 2022) 掲載

12 ポスト・パンク〜インダストリアルの意匠を異様に洗練されたデザインで届けるコペンハーゲンの Posh Isolation は、妖しさ、歪み、マシニック性、そしてロマン性などがアンバランスにせめぎ合い、時としてネガティブなエモーションや暴力性として表出するサウンドを美しく統合された音楽として知覚させるという機能において、ここに挙げた中でも Tolerance 作品との共振をより強く感じられるレーベルだ。付け加えて、Posh Isolation の登場後、その影響を受けつつ音楽性の焦点を絞りデザインのミニマル性を強調しスピーディーにリリースを展開したカセットレーベル群(Janushoved、Vienna Press、Weight Of Ages、Caprice & Necessity、Autumn Archives など)が多発する流れも、Vanity Records が『Divin』を最後にレコードの発行を停止し方向性を「工業神秘主義音楽」へと定め、デザインの統一されたカセット作品の制作へと移る流れと奇妙な相似を成している。

Fragments about Tolerance
~post-punk, soaring, and monochrome~

yorosz (aka Shuta Hiraki)

The two albums, the limited information that can be gleaned from the covers (members' names and instrumentation), and the few demos that have been discovered and released in later years[1]... The traces of Tolerance's activities are too few to compose a comprehensive document. Also, in terms of critical reception, if one excludes the anecdotal references to the legendary Vanity Records label from which it was released and its inclusion on the Nurse With Wound List, there have been few opportunities to discuss it in the 40-plus years since its release. Of course, the fact that Junko Tange, the leader of Tolerance, and Masami Yoshikawa, a supporting member of Tolerance, have not been active in music since the release of 'Divin' (1981), and have not been heard from since until 2023, may have had a lot to do with this situation. It is difficult to write anything more than a delusional letter about their music, as there is very little definitive information to reference. This article examines their works from several aspects, mainly with an eye to bringing them into the sights of younger listeners, and exploring the possibility of their discovery as music of the present, although it is needless to say that the project is also delusional too. However, now that the albums are widely available not only in Japan but also overseas in high-quality formats through the CD reissue by KYOU RECORDS and the analog/hi-res reissue by MESH-KEY[2], I find it inevitable to write about them[3]. The numerous bottled mails received may serve as clues to discern a clearer image amidst the still uncertain and elusive evaluation of Tolerance. As Yu Hirayama wrote, 'Everything in 'Rock Magazine' is just beginning[4].' Similarly, everything in Vanity Records is also just beginning.

〈post-punk〉

The sound of Tolerance still leaves much room for new criticism, as it continues to encompass many mysteries. However, the second album 'Divin' can be evaluated as having pre-techno elements in many aspects, as the main musical framework revolves around electronic repetition[5]. It also foreshadows the direction of Vanity Records following this release (=INDUSTRIAL MYSTERY MUSIC), making it relatively easier to determine the appropriate evaluation. On the other hand, 'Anonym' is not as cohesive as the subsequent album, but it is precisely this lack of unity that allows the various possibilities of sound that emerged 'after punk' to be perceived as shadows of an unstable era woven into the music. If we consider 'Divin' as merely one image among countless shadows (that is, if we imagine the elements that were not carried over from 'Anonym' to 'Divin'), what kind of sound will emerge? For example, Tange's pianism, which skillfully created shadowy motifs in 'anonym,' may lead to a minimal ambient horizon with the desolate romanticism of Robert Haigh, Vanessa Amara, Lisa Larkenfeld, and so on[6]. The spasmodic guitar and poetry reading concerto 'osteo-tomy' seems to be a floating missing link between No Wave and subsequent bands like Sonic Youth and Rip Rig + Panic. And the 'laughing in the shadows,' depicted with a wandering bass melody and a rustling piano accompanied by sound effects, bears a latent affinity to David Lynch's 'Twin Peaks' and other peculiar films/dramas. These possibilities that vaguely emerge from this work cannot help but make me dream of the path that Tolerance might have taken after this (or beyond 'Divin'). The album, entitled 'Anonym,' perhaps due to its lack of certainty, constantly stimulates the imagination of things that did not happen or could have happened in different ways. The sound is therefore still captivating and relevant.

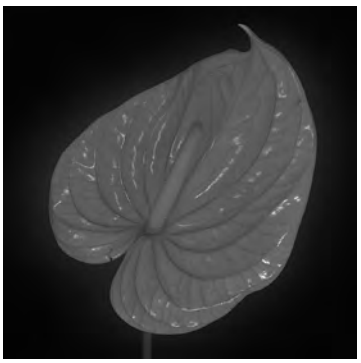
Robert Haigh『Black Sarabande』
(Unseen Worlds, 2020)

Vanessa Amara『Like All Morning』
(Posh Isolation, 2017)

Lisa Larkenfeld『A Liquor Of Daisies』
(Shelter Press, 2020)

〈soaring〉

In 'Divin,' Tolerance's sound has undergone a drastic change from their previous work, with a pronounced emphasis on electronics[7]. In contrast to 'Anonym,' where the nebulous performance of instruments and electronic sounds created a sense of instability, as if wandering toward the abyss, 'Divin' maintains abstraction through dub processing, but the unity of the electronic sounds and the extensive use of rhythm machine sequences give it a pessimistic edge, as if soaring alone at the end of a wandering journey. As a result of this musical mutation, the elements that could be heard in the previous album, such as piano and guitar sounds, have almost disappeared. However, only Tange's voice continued to be used[8]. The style of building up sounds with electronics and intertwining voices with them has always been attempted by a certain number of artists, both before and after "Divin"[9]. However, coincidentally or inevitably, as of 2023, there are many exciting newcomers to the lineage that are noteworthy. The booming scene includes Felicia Atkinson, Flora Yin Wong, Lucy Liyou, Debit, Kelly Lee Owens, Adela Mede, Laila Sakini, Caterina Barbieri etc...In 2023 alone, I will see the likes of Susu Laroche's Closer to the Thing That Fled, Cruel Diagonals' Fractured Whole, Grand River's All Above, Sara Persico's Boundary, and the list of artists and their excellent works goes on and on. It is highly unlikely that Tolerance had any direct influence on these artists. It would be overstating things to consider them role models because of their shared production style, sound, and other similarities. But I can assure you that along with the works of the artists mentioned above, it is inevitable that "Divin" will be discovered as music of the present. This work has that much power in it.



Flora Yin Wong『Holy Palm』
(Modern Love, 2020)

Kelly Lee Owens『LP.8』
(Smalltown Supersound, 2022)

Grand River『All Above』
(Editions Mego, 2023)

〈monochrome〉

The monochrome jacket design of Tolerance's works is as appealing as the sound.

Anonym," featuring a photograph by Toshimi Kamiya, and "Divin," mysteriously credited to FUSIFIX and GEKKÖ-V4 as COVER CONCEPTS[10], were both directed by Vanity Records producer Yuzuru Agi, who provided the final design. Noi Sawaragi describes Agi's qualities as a "wild stylist[11]," and these designs give Tolerance's unstable sound an image that serves as a compass for the listener. This is truly the quintessential work of Yuzuru Agi as a stylist. Bewitching, distorted, machinic—any of the various expressions that Tolerance's sound unveils—can be fully perceived as beautiful music through the artwork. The impact of the design is so vivid that it surpasses even other works designed by Yuzuru Agi in the Vanity Records catalog. I am convinced that without this design, the sound would not have sounded as beautiful as it does. However, for those who are familiar with Agi's later work, especially in his later years, the monochromatic style of this work takes on an even more special significance. In fact, the abundance of monochrome and aesthetically pleasing artwork in the works he passionately introduced during his later years and actively used in his DJ performances (which he referred to as bricolage) suggests that selecting such designs may have been his top priority. Modern Love, Posh Isolation[12], Stroboscopic Artefacts, Downwards, Second Sleep, and Schwebung by Stephan Mathieu, to name just a few, all showcase the marriage of serenity and sensuality in their designs. It appears that this sense has always been at the core of Agi's aesthetic sensibility, as exemplified by Tolerance's artwork. It is no wonder that Agi himself listed "Divin" as his favorite Vanity Records work, given the vividness of its directional effects. But not only, the design of Tolerance may have occupied a special position for him as the first work that crystallized his love of monochrome, a love that continued into his later years.

The Stranger『Watching Dead Empires In Decay』(Modern Love, 2013)

Millie & Andrea『Drop The Vowels』(Modern Love, 2014)

Puce Mary『The Spiral』(Posh Isolation, 2016)

Kerridge『Fatal Light Attraction』(Downwards, 2016)

Hvide Sejl, Varg, F. Valentin『Brazil』(Posh Isolation, 2017)

Stephan Mathieu『Radiance』(Schwebung, 2018)

注釈

---

1 ”Dose” and “Demos”(KYOU RECORDS-remodel)

2 The reissue on MESH-KEY is a newly remastered edition by Stephan Mathieu, sourced from the original analog tapes. The sound has been enhanced, resulting in greater clarity and edginess. Specifically, "Divin," with its predominant electronic sounds, demonstrates a noticeable improvement in quality, even when played on modest audio equipment.

3 A review by Philip Sherburne on Pitchfork and a product review on boomkat have already appeared about the MESH-KEY reissue.
https://pitchfork.com/reviews/albums/tolerance-anonym-divin/
https://boomkat.com/products/anonym-0c9c04ef-3f4f-4cfb-9031-1b137c125b63
https://boomkat.com/products/divin

4 From the book "AGI" (Kyo RECORDS, 2022), supervised by Yasuyuki Nakamura.

5 A review by Philip Sherburne in Pitchfork references minimal techno and dub techno artists like Thomas Brinkmann and others. Personally, I find that Tolerance's pre-techno music shares a similar vibe with the uniquely eclectic releases on the Los Angeles-based label Peak Oil.

6 The string-like tones and muffled synth sounds that emerge on tracks 5 and 7 of "Dose," along with a choir that evokes memories of Eno's Ambient 1: Music for Airports in "Demos," further fuel my delusion.

7 While not widely recognized, it is worth noting that the last track, "Tiez Rekcuz," on "Divin" is actually an anagram of Cluster's 1974 album "Zuckerzeit." While multiple factors could have influenced the shift in style from "Anonym" to "Divin," this fact suggests that Cluster served as a significant reference point for Tolerance.

8 Of interest with regard to Tolerance's use of voice are "Dose" and "Demos," both of which seem to have been produced around 1980. In particular, "Demos" contains a choir-ambient part that recalls Brian Eno's "Ambient 1: Music for Airports. Perhaps Eno's contemporaries and their sound (as well as cluster that played with him) were also important references for Tolerance.

9 Robert Ashley's "Automatic Writing," considered a benchmark for such experimental works, was released in 1979, coincidentally the same year as "Anonym." This composition, which incorporates elements of "free-form performance" through the use of synthesizers and organs, as well as "music created through tape manipulation" utilizing diverse acoustic materials, seems to bridge the gap between "Anonym" and "Divin" when listened to in juxtaposition.

10 FUSIFIX is a term that refers to a titanium bolt used in the treatment of complex fractures. Initially, the cover design for "Divin" was envisioned to feature a skeletal design with radiographs, following the style of "Faust" (1971). However, due to cost constraints, this concept had to be abandoned, and instead, several images were integrated, drawing inspiration from other works by Faust such as "So Far" and "IV." Therefore, the term FUSIFIX was playfully brought up during the production stage and may have been included as a playful reference. As for GEKKÖ, it appears to be a word in Tibetan Buddhist terminology, but its specific relationship to the album is unclear.

11 From the book "AGI" (Kyo RECORDS, 2022), supervised by Yasuyuki Nakamura.

12 Posh Isolation, based in Copenhagen, is known for delivering post-punk and industrial sounds accompanied by exceptionally sophisticated design. The captivating blend of bewitching, distorted, machinistic, and romantic elements in their music may at times evoke negative emotions or violence, yet it is perceived as a beautifully integrated experience. In this regard, the design aesthetics of Posh

Isolation resonate strongly with Tolerance's work compared to the other mentioned labels. Furthermore, following the emergence of Posh Isolation, a wave of cassette labels such as Janushoved, Vienna Press, Weight Of Ages, Caprice & Necessity, Autumn Archives, and others appeared on the scene, exhibiting a similar trend. This trend is similar to how Vanity Records ceased publishing records after "Divin" and shifted its direction to "INDUSTRIAL MYSTERY MUSIC" and a uniform design for its cassette works.

「音楽家Stephan Mathieuの活動終了に寄せて —A Young Person ‘s Guide To Stephan Mathieu—」

よろすず

2022年9月2日、ドイツはボンを拠点に音楽家／マスタリング・エンジニアなどとして活動しているStephan Mathieuの音楽家としての活動の終了が彼のレーベルSchwebungからのメッセージによって発表された[1]。彼は2018年には既に音楽制作をストップしマスタリング・エンジニアとしての仕事に専念していたが、この8月に新しいスタジオを設立し、それに合わせて正式に音楽制作の終了を発表した、という経緯のようだ。また、彼は「音楽が消えてしまう」という考えを好んでおり、そのスタンスに基づき自身のレーベルSchwebungでの作品販売を後日終了することも合わせて発表。本稿執筆時の2022年9月末の段階で、それらの彼の主要作はbandcamp上から削除こそされていないものの、試聴や購入は一部の作品を除き不可となっている（過去に購入歴があるアカウント上には視聴やダウンロードが可能な状態で残っているようだ）。しかしながら彼が音楽家として発表した幾多の作品やその足跡は、筆者にとっては忘れ難いものであり、多くの実験的な電子音楽やアンビエント、ドローンなどに関心のあるリスナーにとってもそうであろうし、これから彼の存在を知る未来のリスナーにとってもそうなり得る可能性を大いに秘めていると確信できる。そこで今回は、彼の音楽家としてのキャリアを主要な作品を取り上げながら辿ることで、その音楽が消えない（忘れられない）ための至極ささやかな抵抗を試みたい。前述した通り彼の作品のうちSchwebungからリリースされたものは既にbandcampでの試聴や購入が不可となっているが、現時点ではBoomkatなどの他のデジタル音源販売サイトで引き続き販売が行われており、またSchwebung以外のレーベルから発表された作品などについては各レーベルから入手が可能なため、本稿で初めて彼の存在を知る方も気後れすることなくその作品に触れてみていただきたい。

【生い立ち、ドラム奏者として】

Stephan Mathieuは1967年、ドイツのザールブリュッケンに生まれた。レコード店に勤務していたという母、そして熱心なレコード・コレクターでありフォークやブルースハープの演奏家／シンガーでもあった父の影響の下、幼い頃からポップミュージックに親しんだ彼は、10才の頃にドラムを始め、1988年にはPaul LovensとMilford Gravesという伝説的なドラマーを知ったことをきっかけにインプロヴィゼーションに興味を向ける。そして1990年にベルリンに引っ越すと、Axel Dörner、Andrea Neumann、中村としまるなど、当時のベルリン・シーンで活動していた演奏家を中心に多くの音楽家と共演の機会を持つ。この時期の彼のドラマーとしての演奏は録音作品としてはギタリストのOlaf RuppとのユニットStolとして残した2作『Semi Prima Vista』(Algen, 1996)と『Stol』(Kitty-Yo, 1998)、更にButch Morrisがベルリンの演奏家からなる楽団Berlin Skyscraperをコンダクションしたアルバム『Butch Morris Conducts Berlin Skyscraper』(FMP, 1998)で聴くことができる。

【コンピューターとの出会い】

即興の分野でのドラマーとしての活動は1998年頃までは行われていたようだが、その最中の95年、とあるスタジオで録音を行った際に、そのスタジオに搭載されていたPro Toolsで作業を行ったことがコンピューターでの制作に踏み出すきっかけとなる。そして1997年、自身のコンピューターを用いての初めての作品となる「11.55.330」を制作。フロアタムを一発叩いただけのサウンドを素材に、Pro Toolsでの様々なエディットによって作成されたこの楽曲は、2000年にOrthlorng MusorkからFull Swing名義でリリースされた『Full Swing EP』のA面に収録され、2019年にはSchwebungのbandcampにて単独で公開された[2]。1998年には自身によるピアノ演奏をエディットしたグリッチーな電子音響作品『Wurmloch Variationen』を制作。これが2000年に彼のデビューアルバムとしてRitornellよりリリース

され、電子音楽家としてのStephan Mathieuの名が世に広く知られることとなる。また『Wurmloch Variationen』の制作と同時期に、彼はフランスのメスの伝統的な電子音楽スタジオCERM（Centre européen de recherche musicale）でエンジニア兼講師として働き始め、ARP、Crumar、EMS、Moog、New England Digital、Rolandなどのヴィンテージ機材と、最新のPro Toolsを備えたスタジオを構築する機会に恵まれる。これによって自宅の小さなスタジオ環境で組み立てていた素材をそこに持ち込み作品として仕上げることも可能となり、Kid Clayton、Ekkehard Ehlers、Monolakeなどの楽曲をエディットしたFull Swing名義での作品集『Edits』(Orthlorng Musork, 2001)もこの工程で制作された。そして2000年11月から2001年3月にかけて、パブリックドメインの楽曲をエディットすることによってアルバム『FrequencyLib』(Ritornell, 2001)を制作。ここでは放牧的な印象のフリー楽曲の断片をループ化し、グリッチによる音響やリズムのたわみを織り交ぜていく手法が多用され、ループ自体の持つ色彩や小気味よさと、スキットが連なっていくような各トラックの時間構成によって、ほのかにヒップホップ的なノリもまとったポップで小春日和な雰囲気のエレクトロニカが生み出されている。また本作で興味を引くのが「Processed with Soundhack, Argeïphontes Lyre, Max/Msp and Protools Free」という使用ツールの記載だ。後述するが、これらのプラグインや音響プログラミング環境の組み合わせはこれ以降も彼の作品を根本で支える重要なツールとなっていく。

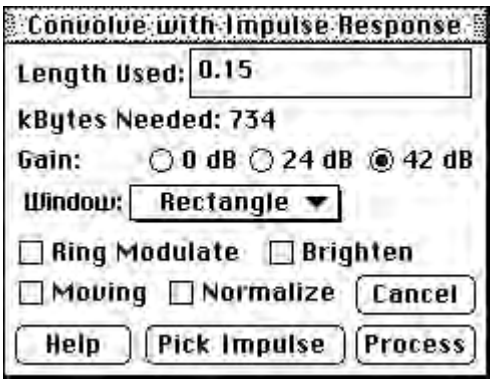
【エディットからプロセスへ】

2002年リリースの『Die Entdeckung Des Wetters』(Lucky Kitchen)には、ベルリン市庁舎で行われたガラスの展覧会のためにザールブリュッケンの美術デザイン大学HBKザールから依頼された「Touch」と、19世紀末に設立された鉄工所の文化遺産「Völklinger Hütte」のために作曲されたタイトルトラック「Die Entdeckung Des Wetters」が含まれている。本作の制作時期にStephanは、前作でも使用されていたSoundhack、Argeïphontes Lyre、Max/Mspをベースとして、エントロピック・プロセスやコンボリューションといった技術を応用したサウンド・プロセッシングのためのシステムを開発しており、『Die Entdeckung Des Wetters』にはそれを用いた最初の成果が含まれている。また、ここに収められたサウンドはこれまでの作品に比べて柔らかいトーンで揺れるように変化するドローンの比重が格段に増しており、作風としても変化を感じさせる。これ以降、彼はこの時点で開発されたシステムを継続的に用い、それによってプロセッシングされる音響ソースのみを変化させる、いわばヴァリエーション的な制作へと活動の方向性を定め、独自のアンビエント／ドローンな作風を日夜深化させていくことになる。そのため『Die Entdeckung Des Wetters』は制作工程とそれによって生み出される作品の性質の両面で、重要な転換が起こった一作と捉えられるだろう。

『Die Entdeckung Des Wetters』(Lucky Kitchen)

ここで彼がこれ以降も制作において中心的に用いていくエントロピックやコンボリューションといった技術について簡単に説明しておきたい。Stephan Mathieuが制作に用い、インタビューなどでも度々言及や紹介をしているエントロピック・プロセス(Entropic Process)とエントロピック・システム(Entropic System)は、おそらく広く一般化された名称ではなく彼独自の表現と思われる。エントロピック・プロセスは「スピーカーから音声を再生→マイクで拾って録音→それを再度スピーカーから再生→マイクで拾って録音...」と繰り返す、Alvin Lucierの『I Am Sitting In A Room』で用いられていることでも有名なアナログ・プロセスのことのようで、彼がPCを制作に導入して最初に行ったことも自身の11分間のピアノ演奏を自室でこのプロセスに26回かけることであったそうだ(ちなみにこの時の音声はインスタレーションに使用され、元となったピアノ演奏は別のエディットを経て彼の初アルバム『Wurmloch Variationen』として作品化される)。このプロセスにかけられた音声は、部屋の形状やマイクの位置、そしてマイク等の録音機材そのものが持つ特徴によって生まれる音響特性を録音の度に獲得していくことで徐々に変容していくことになる。「entropy」は拡散化や衰退、そして物理や情報理論の専門的な用語としての意味も持つ語のようだが、Stephanはこの録音過程によって獲得／蓄積されていく何らかの複雑性をこの語を用いて表しているのだろう。

もう一方のエントロピック・システムはおそらくこのアナログのエントロピック・プロセスに着想を得てStephanが独自に設計したソフトウェア・システムを指していると思われる。そしてそのソフトウェア・システムにおいて重要な役割を担っているのがコンボリューション(convolution)だ。コンボリューションは2つの関数を掛け合わせる数学的な演算の事であり、日本語では「畳み込み」と表現される。音声処理や音楽制作の場面ではこの技術はある音声(便宜上「入力」と表現する)を、もう一方の音声(こちらは「処理側」とする)で畳み込むことによって、入力が処理側の音響特性を経た状態で出力される、一種の合成的な処理としてリバーブやフィルターなどに応用されている。過程を省いてしまい申し訳ないが、このプロセスの特徴として、処理側に「ホワイトノイズなど広くかつ均質な周波数を持った音声の短い発音とそれに対する空間の残響を含んだ音声(インパルス・レスポンス=IRと呼ばれる)」を用いれば、入力側の概形が保たれたまま音響特性が変化する高品質なリバーブ的効果が得られるため、例えばこの処理を自室の音響を用いて重ね重ね行えば、それはアナログのエントロピック・プロセスのシミュレーションといえる効果を生むだろう。Stephanが自身のシステムにコンボリューションを応用するのも正にこのためであり、"Soundhackのコンボリューション・アルゴリズム[3]が、私が以前から魅了されていたアナログのエントロピック・プロセスに似ていることから興味を持ちました[4]"と発言している。そのためSoundhack、Argeïphontes Lyre、Max/Mspをベースとした彼のシステムでは、コンボリューションをエントロピック・プロセスのシミュレーション、更には複雑な応用として用いていると思われる。ここからは筆者の推測だが、彼はおそらく処理側に整ったIRだけでなく、楽器の持続音やフレーズの演奏など均質ではない音響も用いることで、コンボリューションを入力の概形が素直に出力に表れない予想のし難い変質を導くフィルターとして多く使用しているのではないだろうか。



SoundHackのConvolution

また、このようなコンボリューションへの傾倒には、エントロピック・プロセスが彼の元来の関心であったことに加え、『Wurmloch Variationen』から『FrequencyLib』までの制作でプラグインをエフェクトとして使い細かなエディッ

トをすることへ飽きが生じたという背景もあったそうだ。自分の理想となるサウンドを目指し細かなエディットを繰り返すことから、予想のし難い特定のプロセスのみを用いその結果を受け入れることへの軸足の移行は、ロマンチックな捉え方をするならコンピューターに対する態度が指示的なものから対話的なものへ変化したと形容できるかもしれない。そのような態度は2003年にリリースされた『Kapotte Muziek by Stephan Mathieu』(Korm Plastics)[5]からも伺える。『Kapotte Muziek』は、オランダ(2004年以降はドイツ)のレーベルStaalplaatが1996年にベルリンで行った「the Staalplaat Sonderangebot Festival」の音源[6]を、様々なサウンド・アーティストに依頼しエディットしてもらうという一種のリミックス・シリーズである。Stepahanはこの作品に取り組んでいる最中に制作環境の変更(ラップトップの交換とOSのアップデート)を行ったのだが、その過程でマシンにクラッシュが起こりバッファから作業していた音声が変形されて吐き出された。そこでStephanは吐き出された音声を"私の素材をメドレーにして、コンピュータ自身が仕上げたもの[7]"と捉え、またそこにシリーズのタイトル「Kapotte Muziek」(壊れた音楽)との皮肉な縁を感じ、クラッシュ音声をそのまま作品として収録することにしたという。この事例は正にコンピューターから発された声を受け入れる彼の新たなスタンスを象徴するものといえるだろう。

【入力の変遷】

2004年にリリースされた『The Sad Mac』(Headz)は実に10名以上の音楽家による多種の楽器演奏を、『Die Entdeckung Des Wetters』の時期に確立されたシステムで処理した音響作品で、コンボリューション処理による一聴してアコースティックともデジタルとも判別のつかないような輝かしいドローン・サウンドは今もって瑞々しい。本作は彼が3年に渡って見舞われた度重なるPCトラブルに捧げられ、また複雑なDSP処理への別れの意味合いも込められており、前章で述べた終わりなきエディットに対する別れが新たなプロセスが生む音響によって高らかに歌い上げられる、正しく新境地の一作と位置付けられる。手法としては『Die Entdeckung Des Wetters』にて確立されたものの延長線上にありながら、そこにハープシコード、ヴィオラ・ダ・ガンバ、リュートなどの古楽器、更にラジオやワックスシリンダーなど、これ以降も度々作品に表出されるルネサンス期の文化や忘れかけられているオールド・メディアへの深い関心が入力されることで、サウンド自体のクオリティに各段な向上が感じられ、魔術的なトーンのアンビエント/ドローン作家としてのStephan Mathieuがこの時点で完全に確立された印象だ。

続いて2008年リリースの『Radioland』(Die Schachtel)ではシステムに入力される音源として短波ラジオを選択。"ソフトウェア・システムとランダムなラジオストリームの相互作用に魅了された[8]"と自ら語るように、ここにはリアルタイム・プロセスによって得られた(マルチトラックではない)一本のストリーム音声とは信じがたいほど蠱惑的な色彩の移り変わりを持ったサウンドが収められている。本作の制作は2005年から2006年にかけて行われているが、その後も彼はこの短波ラジオのリアルタイム・プロセスの手法でライブ演奏などを多く行っており、その作用に深く魅了されていたことが窺い知れる。2012年にLINEからリリースされた『Radioland (Panorámica)』は短波ラジオのストリームとCaro MikalefによるE-bowを用いたツィターの演奏をコンボリューション処理で相互に変換した2011年3月11日のライブ演奏を収めたもので、正にそういった継続的な演奏活動の成果といえる作品だ。

2011年2月1日には12kとLINEより『A Static Place』と『Remain』という2作のアルバムが同時リリースされる。筆者がStephan Mathieuの作品を初めて耳にしたのがこれらのリリース時だったのだが、特に前者『A Static Place』は再生するなり流れ込んでくるサウンドが、曇り硝子に当たる光のような、もしくはオーロラを連想させるような、魅惑的なグラデーションのジャケットと相似を成すゆらめきを以って、私の身体を包み込むように感じられ、忘れ難い経験となっている。それはさながらMy Bloody Valentineの「to here knows when」を初めて聴いた時に感じた幽玄さを想起させ、音が楽曲という固定的な像を結ばず、肌触りのみが知覚され続けるような、柔らかい衝撃であった。『A Static Place』ではStephanは自身の78回転のレコード(いわゆるSP盤)のコレクションの中から1928年から1932年にかけて録音された後期ゴシック、ルネサンス、バロック時代の音楽を選び出し、2つの蓄音機で再生し、それぞれをマイクで拾ってシステムに入力している。Stephanは短波ラジオを用いた『Radioland』のプロジェクトがひと段落した2007年からこういったSP盤を本格的に集め始め[9]、それらは同年夏から2008年冬にかけて制作されたTaylor Deupreeとのコラボレーション作『Transcriptions』(Spekk, 2009)において既に入力として用いられているが、彼単独の作品としては『A

Static Place』において初めてこの手法の成果が結晶化されている。また2012年に12kからリリースされた『Coda (For W.K.)』も同様の手法で、入力に1927年にリリースされたWilhelm Kempffによるベートーヴェンのピアノソナタ第26番第一楽章のレコードを用いており、この作品自体がタイトルで示されているように『A Static Place』のコーダという位置付けとなっている。同時リリースされた2作のもう一方、『Remain』はStephanとコラボレーション作品『Hidden Name』(Crónica, 2006)もリリースしているアーティストJanek Schaeferのインスタレーション作品であり録音作品『Extended Play』(LINE, 2008)の音源を入力に使用した作品である。『Extended Play』は会場内の9台のターンテーブルからポーランド民謡を基にしたフレーズをチェロ／ピアノ／ヴァイオリンでそれぞれソロ演奏したEPがさまざまな回転数で継続的に流れるという作品であるため、ターンテーブルから再生された音をマイクで拾って使用するという点で『Remain』は『A Static Place』と共通性を有している。

そして、フロベールの小説をもとにした音楽劇のために2010年に制作され、2013年にBaskaruよりリリースされた『Un Coeur Simple』では入力音源としてツィター、ヴィオラ・ダ・ガンバ、ターンテーブル、シンセサイザー(ARP 2600)とこれまでに試みられたものを抱合的に動員する、ある種総決算的な態勢に至っている。

このように、『Die Entdeckung Des Wetters』の時期にシステムを確立して以降のStephan Mathieuの作品は、新たなテクノロジーを取り入れるのではなく、確立されたシステムに古い楽器やワックスシリンダー、短波ラジオ、SP盤と蓄音機など、忘れかけられているオールド・メディアを接続する一連の試みと捉えることができるだろう。

『A Static Place』(12k)

【Schwebung】

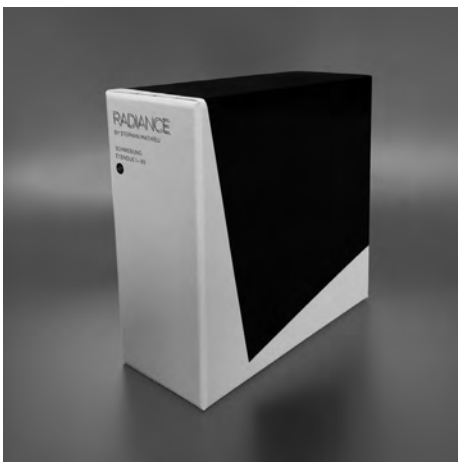
2012年、Stephan Matieuは自身が運営するレーベルSchwebungを設立し、Sylvain Chauveauとのコラボレーションによって Smog(Bill Callahan)の楽曲／詩／サウンドを再構成した作品『Palimpsest』をリリースする。これ以降彼の作品は音楽家としての活動を停止するまで、一部の例外(『Un Coeur Simple』や、他者とのコラボレーション作品)を除いてこのSchwebungからリリースされていくこととなる。列挙すると『Palimpsest』(2012)、『The Falling Rocket』(2013)、『Sacred Ground』(2014)、『Nachtstücke』(2015)、『Before Nostromo』(2015)、そして『Radiance I~XII』(2016~2017)と『Trace (Recordings Of Entropic Systems 1998—2018)』(2018)がそれにあたる。

このうち『Palimpsest』、『The Falling Rocket』、『Sacred Ground』、『Nachtstücke』、『Before Nostromo』の5作は後の2018年にボックス作品〈Folio〉としてまとめられている(ただし『Palimpsest』はSylvain Chauveauによるヴォーカルを除いたインストバージョンをボックスのタイトルでもある『Folio』と改題して収録)。これらの作品は元々はコラボレーションであったり、映画のための音楽、委託を受けて制作された多チャンネル用の作品であったりと背景は異なっ

ているものの、試みとしてはこれまでに磨き上げられたシステムに、(忘れられかけている楽器やメディアという方向性を保ちつつ)より自由に様々なサウンドを接続していくという面で共通している。『Un Coeur Simple』が制作された2010年頃からこの抱合的に入力音源を選択していく態勢は始まっていると思われるが、ここで注目したいのが、このような態勢となってからの彼の作品では(例えば『The Sad Mac』の頃には多くの演奏家の参加に支えられていた)アコースティック楽器の演奏も基本的にStephan自身が行っている点である。既に10年以上継続的に用いられてきたエントロピー/コンボリューションのサウンド・プロセスに対し、Stephanは古楽器、ラジオなどはもちろん、フォノハープやファルフィッサ・オルガン、ホーナー・エレクトロニウムなど逐次新しく入手された楽器なども入力することで、それらの持つ文化的な背景や文脈の接続を企てるが、異なる技術が必要となる多種の楽器演奏までも自身で行うという姿勢は、同時にそれらを愛を持って収集する「コレクター」としての、そして楽器の歴史や特性を踏まえながらシステムとの対話へと向かう特殊な「演奏家」としてのStephanの存在を意識させずにおかない。〈Folio〉の長大なサウンド・ストリームからは、そのようなStephan個人の存在が遊泳する影のように時折、そこかしこから浮かび上がるように感じられるのである。この点を以ってボックス作品〈Folio〉はこれまでの作品、そして(ボックスとしてまとめられる以前に)収録作に個別に接した際の印象に比して、棚の奥に丁寧にしまわれた本のような、至極パーソナルな嗜好品としての色合いを帯びているように思える。

『Radiance I~XII』は2016年から2017年にかけて個別に1つずつ発表された一種の連作のような作品群で、2018年にCD12枚組のボックスセット〈Radiance〉[10]としてもリリースされている。12の作品は楽器製作者アーノルド・ドルメッチや天文学者ヨハネス・ケプラー、作曲家アルヴィン・ルシエなどに捧げられたものや、映画のための音楽、ライブ録音など異なるコンセプトや背景を持ち、制作もStephan単独のものとコラボレーションが入り混じり、録音時期も古くは2004年の素材が用いられてたりと、様々な面で広がりを持っており、音楽家としての活動終了が発表された現在の時点から振り返るとキャリアをまとめにかかっている印象も色濃い。しかしながらここに収められている音源は彼の築いてきた制作法や音楽をはじめ諸文化(特にルネサンス期)への関心、そしてサウンドの集大成というよりは、これまでのキャリアでアルバム作品としては発表できていなかった自身の活動を補足する傾向が強いように感じられる。〈Folio〉を彼の正典的な集成と捉えるなら〈Radiance〉はさながら外典的な集成といったところだろうか。

〈Folio〉



〈Radiance〉

そして2018年にはそれらの2つのボックスに加えて、初アルバム『Wurmloch Variationen』の制作が行われた1998年から彼が音楽活動を実質的に停止するまでのレア・トラック(主にコンピレーションへの提供曲)と未発表曲を集めた2CDアルバム『Trace. Recordings of Entropic Systems 1998-2018』がリリースされる。タイトルからもおわかりのように、彼が電子音楽の分野に足を踏み入れてすぐに魅了され、キャリアを通じて用いられ続けたエントロピック・システムのアンソロジーである本作は、ここまで記してきた変遷を音で辿る非常に親切なビギナーズ・ガイドとなってくれるだろう。

また、SchwebungではStephanの新作の発表以外に、廃盤などの理由で入手の難しくなっていた過去の作品のリイシューも行われている。具体的には『Wurmloch Variationen』が2020年にレコード／デジタルで再発（レコードはWEEDINGから）、『The Sad Mac』が2013年にデジタルで再発、『Radioland』が2020年にボーナストラック（2005年の50分に及ぶライブ演奏）を加えてCD／デジタルで再発、『A Static Place』と『Remain』が2作を抱き合わせた新たな作品『A Static Place /Remain – 2020 Edition』として2020年にCD／デジタルで再発されている。これらの作品はSchwebungの全ての作品のアートワークを手がけるCaro Mikalefによる新たなジャケットとなっている点も趣深い。これらの再発作のデジタル音源はCD以上の音質のいわゆるハイレゾ形式となっており、Stephanが「2018年には既に音楽活動を停止していた」と発表していることを鑑みると、それ以降に再発されたものについては自らの過去の作品に純粋にエンジニアとして向き合った成果として聴くこともできるだろう。それぞれに愛聴してきた作品の入念にブラッシュアップされた鮮やかなサウンドに、筆者も改めて深く感動した次第だ。

以上、駆け足ではあるが、Stephan Mathieuの音楽家としてのキャリアを振り返ってきた。本稿では複数のインタビューなどを参考にしながら、彼の主要な作品を時系列に沿って紹介し、そこで用いられたサウンド・プロセスを軸に音楽家としての特徴を探り出すことを念頭に置いている。しかしながら文字数や時間の都合上、多くのコラボレーションや、音楽と並行して数多く制作されてきたインスタレーション作品についてはほとんど触れられなかったこと、そして2012年以降Schwebungから発表された作品群についてはボックス作としての位置付けを示すに留まり、個々の収録作について踏み込めなかったことをお詫びしたい。これらについては別の機会に紹介できればと考えている。

最後に筆者のごく個人的なものではあるが、彼の音楽に見出せる一つの位置付けと魅力を言葉にしておきたい。Stephan Mathieuは自らの音楽を「アンビエント」とは捉えていない節があるが[11]、仮に彼の音楽をそう捉えようとするならば（筆者は少なからずそう捉え愛好してきた）、アンビエントの根源的な定義の一つといえる「特定の空間／場所を眼差した音楽」というフレームは有効だろう。そのフレームから眺めれば、特定の空間に潜んでいる音響特性を音声の再生と録音の過程によって炙り出すアナログなエントロピック・プロセスに端を発した制作手法から生まれる彼の作品は、複雑に抽象化された、しかしたしかに何らかの「空間性」をこそ、その本質とした音楽と位置付けられるのではないだろうか。彼の部屋か、楽器の内部か、ラジオノイズの波の中か、レコードの溝か、はたまたそれらが複雑に溶け合ったものか、そこにある「空間性」は、おそらくStephan Mathieu自身の外には知りえないが、しかしそれ故に音に還元された謎として、深く私を魅了するのである。

注釈

---

1 https://schwebung.bandcamp.com/community?sid=900506&st=sm

2 https://schwebung.bandcamp.com/album/1155330 にて現在も試聴可能

3 SoundHack の Convolution についてはこちらのページにて処理の実例音声付きで解説されている。https://www.sfu.ca/~gotfrit/ZAP_Sept.3_99/c/convolution.html

4 https://mockfuneral.github.io/2021/02/15/stephanmathieuinterview より

5 この作品は Schwebung の bandcamp に『A Microsound Fairytale』としてアップされている。https://schwebung.bandcamp.com/album/a-microsound-fairytale

6 このフェスティバルの音源は現在こちらで聴くことができる。https://staalplaat.bandcamp.com/album/sonderangebot

7 http://kormplastics.nl/kmbysm.html

8 https://headphonecommute.com/2013/03/13/interview-with-stephan-mathieu/

9　http://www.spekk.net/catalog/transcriptions.html

10　この〈Radiance〉と『Trace. Recordings of Entropic Systems 1998-2018』は、阿木譲の最後の投稿（https://twitter.com/AgiYuzuru/status/1040090338537304064）にて、" さよなら先端音楽！" という言葉とともにピックアップされた作品としても筆者の記憶に残っている。

11　https://www.chaindlk.com/interviews/stephan-mathieu/ より " アンビエントの文脈の中で自分のものを見ているわけではありません。"

本稿では他にも以下のインタビューなどを参考にした

・http://www.rarefrequency.com/2008/12/stephan_mathieu.html

・https://www.fluid-radio.co.uk/2016/07/stephan-mathieu-the-radiance-interview/

・『The Sad Mac』(Headz, 2004) ライナーノーツ

—A Young Person's Guide to Stephan Mathieu—

yorosz (aka Shuta Hiraki)

On September 2, 2022, Stephan Mathieu, a Bonn, Germany-based musician and mastering engineer, announced via a message from his label Schwebung that he is ending his music career[1]. He had already stopped making music in 2018 to focus on his work as a mastering engineer, but it seems that he has decided to set up a new studio in August 2022, and in conjunction with this, he has officially announced the end of his music production. In addition, he also announced that he likes the idea of "music disappearing," and based on this stance, he will end sales of his works on his own label, Schwebung, at a later date. At the time of this writing, at the end of September 2022, his major works have not been removed from bandcamp, but they are no longer available for listening or purchase, with the exception of a few works (they are still available for viewing and downloading on accounts that have purchased them in the past). However, the many works he has released as a musician and his footprints are unforgettable to me (as they will be to many listeners interested in experimental electronic music, ambient, drone, etc.). I am convinced that these works can become so for future listeners who will come to know him. Therefore, in this article, I would like to trace his career as a musician by taking up his major works, and attempt to make a very modest resistance so that his music will not disappear (or be forgotten). As mentioned above, his works released on Schwebung are no longer available for listening or purchase on bandcamp, but they continue to be available on other digital music retailers such as Boomkat, and his works released on labels other than Schwebung are still available on their respective labels. If this is the first time you have heard of him, please do not be discouraged.

【Upbringing, as a drummer】

Stephan Mathieu was born in 1967 in Saarbrücken, Germany. He was introduced to pop music at an early age by his mother, who worked in a record store, and his father, an avid record collector and folk and blues harp player/singer. He started playing drums at the age of 10 and became interested in improvisation in 1988 when he discovered the legendary drummers Paul Lovens and Milford Graves. In 1990, he moved to Berlin, where he played with Axel Dörner, Andrea Neumann, Toshimaru Nakamura, and various other musicians and performers active in the Berlin scene at the time. His performances as a drummer during this period included two recordings as Stol with guitarist Olaf Rupp ("Semi Prima Vista" and "Stol"), as well as the album "Butch Morris Conducts Berlin Skyscraper" (FMP, 1998).

【Encounter with Computers】

He was active as a drummer in the field of improvisation until around 1998, when in 1995, while recording at a studio, he began working with Pro Tools, which was installed in the studio, and this was the beginning of his foray into computer-based production. In 1997, he produced "11.55.330," his first computer-based work. Created from a single hit of a floor tom and various edits in Pro Tools, the song appeared on the

A-side of the Full Swing EP, released in 2000 on Orthlorng Musork under the name Full Swing, and in 2019, it was released on the It was released independently on Schwebung's bandcamp[2]. He continued in 1998 with "Wurmloch Variationen," a glitchy electroacoustic piece edited with piano performances by himself. This was released on Ritornell in 2000 as his debut album, and made Stephan Mathieu's name widely known as an electronic musician. Around the same time, he was working on "Wurmloch Variationen," he began working as an engineer and lecturer at CERM (Centre européen de recherche musicale), a traditional electronic music studio in Metz, France. There he built a studio equipped with vintage equipment such as ARP, Crumar, EMS, Moog, New England Digital, and Roland, as well as the latest Pro Tools. This allowed him to take material he had been assembling in his small home studio environment and bring it into a full-fledged studio for productions. Edits" (Orthlorng Musork, 2001), a collection of edits of his friend's songs (Kid Clayton, Ekkehard Ehlers, Monolake, and others), was produced using this process. From November 2000 to March 2001, he produced the album "FrequencyLib (Ritornell, 2001)" by editing songs in the public domain. The work often uses loops of fragments of pastoral free compositions and glitches to create sonic and rhythmic flexures. The color and nimble nature of the loops themselves and the time structure of each track, which is like a series of skits, create an electronica with a pop and breezy atmosphere that has a faintly lo-fi hip-hop feel to it. Also of interest is the description of the tools used: "Processed with Soundhack, Argeïphontes Lyre, Max/Msp and Protools Free. As will be discussed later, the combination of these plug-ins and sound programming language became an important tool that fundamentally supported his work from this point onward.

【Rejecting Edit and Establishing Process】

The 2002 release "Die Entdeckung Des Wetters" (Lucky Kitchen) includes "Touch," commissioned by the HBK Saal, the University of Art and Design in Saarbrücken, for a glass exhibition at the Berlin City Hall, and the track "Die Entdeckung Des Wetters" was composed for the cultural heritage site of the late 19th century ironworks "Völklinger Hütte". During the production period of this work, Stephan developed a system for sound processing based on Soundhack, Argeïphontes Lyre, and Max/Msp, which were also used in the previous work, applying techniques such as entropic processing and convolution Argeïphontes Lyre. Die Entdeckung Des Wetters" contains the first results using these techniques. The sound on "Die Entdeckung Des Wetters" also shows a change in style, with a much greater emphasis on soft-toned, shimmering drones than on his previous works. From this point onward, he continued to use the system developed at this point and shifted the direction of his activities to a variation style of production, changing only the sound source processed by the system, and deepening his own drone/ambient style day and night. Therefore, "Die Entdeckung Des Wetters" can be seen as a work in which an important shift occurred, both in terms of the production process and the nature of the work produced by it.

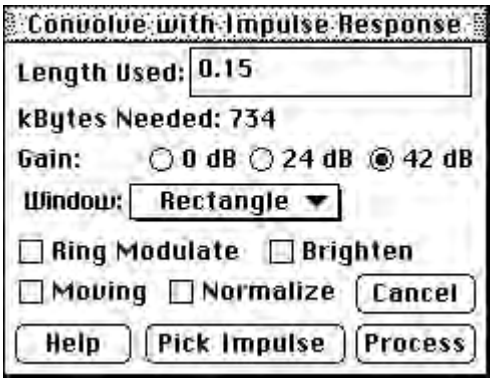
『Die Entdeckung Des Wetters』(Lucky Kitchen)

Here, I would like to briefly explain the entropic and convolution techniques that Stephan Mathieu continues to use as the core of his work. The terms "Entropic Process" and "Entropic System," which Stephan Mathieu uses in his work and often mentions in interviews, are probably not widely accepted names, but rather his own expressions. The entropic process seems to be an analog process of "play audio through speakers, pick it up with a microphone and record it, play it through the speakers again, pick it up with a microphone and record it, and repeat..." This method is used in Alvin Lucier's "I Am Sitting In A Room". He was so interested in this process that one of the first things he did after introducing the PC to his production was to play his 11-minute piano performance 26 times in his room (the sound was used in the installation, by the way. And the original piano performance went through another editing process and was made into his first album, "Wurmloch Variationen"). The sound subjected to this process was gradually transformed by acquiring acoustic characteristics each time it was recorded, which were created by the shape of the room, the position of the microphones, and the characteristics of the microphones and other recording equipment itself. The word "entropy" seems to have the meaning of diffusion and decay, as well as a technical term in physics and information theory, and Stephan may be using it to describe some complexity that is acquired/accumulated through this recording process.

''Entropic System'' probably refers to a software system that Stephan designed himself, inspired by this analog entropic process. Convolution plays an important role in this software system. Convolution is a mathematical operation that multiplies two functions.

In the field of sound processing and music production, this technique is applied to reverbs and filters as a kind of synthetic processing, in which one audio source (for convenience, let us say "input") is convolved with the other audio (let us say "processor"), and the input is output with the acoustic characteristics of the processor (Supplemental but the audio used for the processing side in this method is called IR). One of the characteristics of this process is that if you use "audio containing short pronunciations with wide and homogeneous frequencies such as white noise with its spatial reverberations" for the IR, you can obtain a high-quality reverb-like effect in which the acoustic characteristics change while the general shape of the input side is preserved. So, for example, if this process is performed over and over using the acoustics of one's own room, it would produce an effect that could be considered a simulation of an analog entropic process. This is precisely why Stephan applies convolution to his system, as he states, “Soundhack[3] it was

the convolution algorithms that interested me since they seemed familiar to the analog entropic processes I was fascinated with since a while[4]. Therefore, his system, based on Soundhack, Argeïphontes Lyre, and Max/Msp, seems to use convolution as a simulation of entropic processes, and even as a complex application. My guess is that he is using convolution as a filter that leads to unpredictable transformations, perhaps by using not only IR-aligned reverberations, but also frequency-unhomogeneous sounds such as instrumental sustains or phrase performances.



SoundHack Convolution

He also says that this focus on convolution is due in part to the fact that he became tired of using plug-ins as effects and making detailed edits in the production of "Wurmloch Variationen" and "FrequencyLib". The change from repeatedly making detailed edits to achieve his ideal sound to using only certain processes and accepting the results, which are difficult to predict, can be romanticized as a change in attitude toward computers from directive to interactive. Such an attitude can be seen in "Kapotte Muziek by Stephan Mathieu" (Korm Plastics)[5], released in 2003. Kapotte Muziek" is a remix and edit of the sound sources from the Staalplaat Sonderangebot Festival[6] held in Berlin in 1996, by various sound artists. While Stephan was working on this project, he changed his production environment (replaced his laptop and updated his operating system), and in the process, his machine crashed and the audio he was working on was transformed and spit out from the buffer. Stephan felt an ironic connection between this spit-out audio and the title of the series, "Kapotte Muziek," so he decided to present the work as it was, seeing it as “a medley of my Kapotte Muziek material, finished by the computer itself[7]. This example truly symbolizes his new stance of embracing the voice emanating from the computer.

【Input Transition】

The Sad Mac" (Headz), released in 2004, is a sonic work that features a variety of instrumental performances by more than 10 musicians, processed with a system that was established during the period of "Die Entdeckung Des Wetters. The brilliant drone sound of the convolution processing is still fresh and indistinguishable at first listen from acoustic or digital sounds. This work is dedicated to his repeated PC troubles over the past three years, and is also a farewell to the complex DSP processing. The farewell to the endless edits mentioned in the previous section seems to be sung in high spirits by the new sounds

created by the new process, and it is a work that is truly a new world. In terms of technique, this work is an extension of the method established in "Die Entdeckung Des Wetters". However, it is important to note that it also incorporates elements of Renaissance culture and almost forgotten old media, such as the harpsichord, viola da gamba, lute, and other ancient instruments, as well as radio and wax cylinders. Stephan's interest in these things was ongoing and was frequently reflected in his work after this. The activity of these new inputs made "The Sad Mac" much more complex and richer in sound than it had been before, and the magical tone of the drone was fully established as a major element of his work.

Next, he used shortwave radio as the sound source input into the system for his 2008 release Radioland (Die Schachtel). As he says himself, “The results fascinated me, especially the interaction between my software patch and the random radio streams[8],” and the result is a sound with such fascinating color shifts that it is hard to believe that it is a single stream of audio obtained through a real-time process. Although this work was produced between 2005 and 2006, he has continued to perform many live performances using real-time processing on shortwave radio, and it is clear that he has continued to be deeply fascinated by its setting. Radioland (Panorámica)," released on LINE in 2012, is a live performance (March 11, 2011) of a shortwave radio stream and a zither performance by Caro Mikalef using E-bow, converted into each other through convolution processing. It is the result of continuous performance activities.

On February 1, 2011, two albums, "A Static Place" and "Remain" were released simultaneously on 12k and LINE. These albums were the first time I heard Stephan Mathieu's work. I will never forget the first time I heard "A Static Place". As soon as I played it, the sound flowed into me like light hitting frosted glass (or aurora borealis), a shimmering effect that was akin to the enchanting gradation of the album's cover. It reminded me of the ethereal feeling I had when I first heard My Bloody Valentine's "to here knows when". It was a soft and deep shock, as if the sound did not form a fixed perception of "music," but only the texture of the music was continuously perceived. For A Static Place, Stephan selected music from his collection of 78 rpm records from the late Gothic, Renaissance, and Baroque periods, recorded between 1928 and 1932, and played them on two phonographs, each of which was picked up with a microphone and fed into the system. Stephan began collecting these SP recordings in 2007, after the "Radioland" project was completed, and they were used as input to the system for "Transcriptions," a collaboration with Taylor Deupree produced from the summer of 2007 through the winter of 2008[9]. A Static Place is a beautiful crystalline work that concentrates on that method. Coda (For W.K.), released on 12k in 2012, was created in a similar method. It uses a 1927 recording of Beethoven's Piano Sonata No. 26, 1st movement, by Wilhelm Kempff as input to the system. As the title suggests, this piece is the coda to A Static Place. For "Remain", the other of the two releases, Stephan used sounds from Janek Schaefer's installation "Extended Play (LINE, 2008)" as input to the system. "Extended Play" is an installation in which an Vinyl EP (solo cello/piano/violin) of phrases based on Polish folk songs is played continuously at various RPMs from nine turntables in the venue. By using this as material, "Remain" shares similarities with "A Static Place" in the presence of turntables and microphones.

"Un Coeur Simple" released on Baskaru in 2013, was created in 2010 for a music theater based on Flaubert's novel. For this work, Stephan used a combination of zithers, viola da gamba, turntables, synthesizers (ARP 2600) and previously attempted inputs to the system. So this work can be seen as a culmination of all the work that has been done so far.

Thus, his work since establishing the software system during the period of "Die Entdeckung Des Wetters" can be seen as a continuous attempt to input almost forgotten old media (old instruments, wax cylinders, shortwave radios SP recordings and phonographs, etc.) into the software system.

『A Static Place』(12k)

【Schwebung】

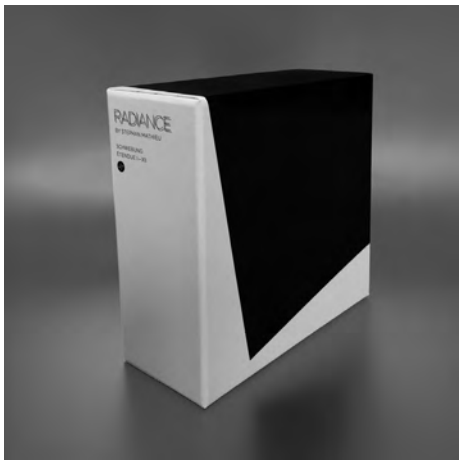
In 2012, Stephan Mathieu founded his own label, Schwebung, and released "Palimpsest," a collaboration with Sylvain Chauveau. From then on, his works were released on Schwebung with a few exceptions ("Un Coeur Simple" and collaborations with others) until he stopped working as a musician. To name a few, "Palimpsest" (2012), "The Falling Rocket" (2013), "Sacred Ground" (2014), "Nachtstücke" (2015), "Before Nostromo" (2015), and "Radiance I~XII (2016~2017) and Trace (Recordings Of Entropic Systems 1998-2018) (2018) are those works.

Five of these works, "Palimpsest," "The Falling Rocket," "Sacred Ground," "Nachtstücke," and "Before Nostromo," were compiled into a boxed set "Folio" in 2018 (although "Palimpsest was re-titled Folio and contains an instrumental version without Sylvain Chauveau's vocals). The backgrounds of these works vary: they were originally collaborations, music for films, commissioned multi-channel productions, and so on. However, they all share a common attempt to input a variety of sounds more freely (while maintaining the direction of almost forgotten instruments and media) into a well-honed software system. This style of comprehensively selecting inputs seems to have begun around 2010, when "Un Coeur Simple" was produced, and It is noteworthy here that Stephan basically plays himself the acoustic instruments in his works after he took this style. In the Folio works, he has taken the entropic/convolution sound process that he has used continuously for more than a decade, and added old instruments, radios, and newly acquired instruments (phonoharp, Farfisa organ, Hohner electronium, etc.) to the mix, thereby creating a new sound that is more culturally relevant. The cultural backgrounds and contexts of these instruments are reflected in the work. But his willingness to play the various instruments himself, which require different skills, also reflects in the work, the existence of Stephan Mathieu as a "collector" who collects them with love (and as a particular "performer" who interacts with the software system). I can feel Stephan Mathieu's presence emerging from the long sound stream of "Folio" like a shadow that occasionally swims by. Compared to his previous works, the boxed Folio seems more like a book carefully tucked away in the back of a shelf, a highly personal object of taste.

Radiance I~XII" is a kind of series of works, released individually one by one between 2016 and 2017, and also released in 2018 as a 12 CD box set <Radiance>[10]. The 12 pieces have different concepts and

backgrounds, including pieces dedicated to instrument maker Arnold Dolmetsch, astronomer Johannes Kepler, composer Alvin Lucier, and others, music for film, and live recordings. The recordings are diverse, with a mix of Stephan's own work and collaborations, and some of the material dates back to as far as 2004. One gets the impression that this is a collection of works that reflect on Stephan's career as a musician. However, rather than being a compilation of his production methods, his interest in various cultures (especially during the Renaissance), and his sound, the works here seem more like complements to his interests that he has not been able to complete in the form of albums during his career. If "Folio" is his canonical collection, "Radiance" is more of an extra-canonical one.

〈Folio〉



〈Radiance〉

And in 2018, in addition to those two boxes, a 2CD album, "Trace. Recordings of Entropic Systems 1998-2018", was released. This album is a collection of rare and unreleased tracks from his 1998 until he essentially stopped his musical career. As you can tell from the title, this is an anthology of entropic systems, which has always fascinated him since he first stepped into the field of electronic music. So this album will serve as a very kind beginner's guide to sound trace the transition I have described so far. In addition to the release of Stephan's new work, Schwebung has also reissued some of his past works that had become difficult to obtain for reasons such as being out of print. Specifically, "Wurmloch Variationen" was reissued digitally and on vinyl in 2020 (on WEEDING), "The Sad Mac" was reissued digitally in 2013, and "Radioland" was reissued in 2020 with bonus tracks on CD/digital, and "A Static Place" and "Remain" were reissued on CD/digital in 2020 as a new work that embraces the two albums, "A Static Place /Remain - 2020 Edition". These albums featured new covers by Caro Mikalef, who has done the artwork for all of Schwebung's works. Also, the digital albums on the reissue boards are high-resolution files, so the sound quality is even higher. Given that he announced that he had “I stopped making music in 2018 to focus entirely on mastering,”the reissues since then may be the result of a purely engineering approach to his own past work. I was again deeply moved by the carefully brushed up and vivid sound of the works that I have loved listening to.

The above is a brief review of Stephan Mathieu's career as a musician. This article is intended to introduce Stephan Mathieu's major works in chronological order, drawing on multiple interviews and other sources, and to explore his characteristics as a musician based on the sound processes used in his works. However, due to the number of words and time constraints, I could hardly mention his many collaborations or the numerous installation works he has created in parallel with his music. I am also sorry that I could not delve into the individual works included in this collection, as I could only give an evaluation of the works published by Schwebung since 2012 as boxed works. I hope to be able to introduce them at another time.

Finally, I would like to put into words, in my very personal opinion, the appreciation and attraction that I find in his music. Stephan Mathieu does not seem to see his music as "ambient,"[11] but if one were to try to see his music as such (and I have seen and loved it as such), one of the fundamental definitions of ambient, "music that looks at a specific space/place," would be valid. His music is played by a unique system inspired by an analog entropic process that reveals the acoustic properties latent in a particular space through the process of sound reproduction and recording. In other words, his music is the essence of "spatiality," which is abstracted (but real) in a complex convolution process. The "spatiality" hidden in the sound may be in his room, inside his instruments, in the radio streams, in the grooves of a record, or in a complex fusion of these…… perhaps no one but Stephan Mathieu can know. But that is why its spatiality, as a mystery reduced to sound, fascinates me so deeply.

注釈

---

1 https://schwebung.bandcamp.com/community?sid=900506&st=sm

2 Still available for listening at https://schwebung.bandcamp.com/album/1155330

3 SoundHack's Convolution is explained with audio examples of the process on this page. https://www.sfu.ca/~gotfrit/ZAP_Sept.3_99/c/convolution.html

4 https://mockfuneral.github.io/2021/02/15/stephanmathieuinterview

5 This work is up on Schwebung's bandcamp as "A Microsound Fairytale". https://schwebung.bandcamp.com/album/a-microsound-fairytale

6 https://staalplaat.bandcamp.com/album/sonderangebot

7 http://kormplastics.nl/kmbysm.html

8 https://headphonecommute.com/2013/03/13/interview-with-stephan-mathieu/

9 http://www.spekk.net/catalog/transcriptions.html

10 I remember that this "Radiance" and "Trace: Recordings of Entropic Systems 1998-2018" were picked up with the words "Farewell to cutting-edge music!" in last posted by Yuzuru Agi (https://twitter.com/AgiYuzuru/status/1040090338537304064).

11 “I don’t see my things in the context of ambient, quiet the opposite.” https://www.chaindlk.com/interviews/stephan-mathieu/

This article also draws on other interviews, including the following

・http://www.rarefrequency.com/2008/12/stephan_mathieu.html

・https://www.fluid-radio.co.uk/2016/07/stephan-mathieu-the-radiance-interview/

・『The Sad Mac』(Headz, 2004) liner notes